

太宰府：西の都

約 1300 年前、九州北部の太宰府の町は、帝都に次ぐ行政・文化の中心地であった。この地は、アジア大陸への近かったため朝鮮半島や中国からやってくる移民や商人、聖職者、外国の要人などの玄関口となった。新しい政治体制、技術、芸術など、彼らがもたらした文化は、太宰府を小さな地方の集落から、人口 2 万人から 3 万人の国際都市へと変貌させた。太宰府に到着した外交官は、都と同じように豪華な迎賓館で迎えられた。また、太宰府には国家の行政機関、上級役人向けの学校、国内初の仏教僧の就任式が行われたところを含む仏教寺院などがあつた。都市の広範な官僚機構は、九州全域の税収、経済、治安を統括していた。8 世紀から 12 世紀後半にかけて、帝都は何度か遷都されたが、太宰府は日本の「西の都」としての地位を維持した。

初期の文化交流

5 世紀から 6 世紀にかけて、日本には多くの文化や技術が流入した。中国は当時、東アジアで文化面でも政治面でも支配的な力を持っていたし、朝鮮半島のいくつかの王朝も比較的進んでいた。九州は、こうした大陸の近隣諸国と、人、思想、技術の絶え間ない交流を経験した。これは、東アジアからの船が到着する主要港であった博多湾を中心とする福岡地方で特に顕著であった。太宰府周辺のいくつかの古代遺跡、例えば善一田

古墳群や牛頸須恵器窯跡などの発掘調査によって、朝鮮半島に起源を持つ、あるいは大陸の様式を忠実に模倣した鉄器や武具、土器が出土している。鉄工技術や須恵器（非常に硬い青灰色の陶器）を作るノウハウは、いずれも輸入され、盛んな地場産業の発展のために利用された。

政治的緊張と要塞化

日本における大陸との関わりは、近隣諸国の政治闘争に巻き込まれるという代償を伴った。日本は朝鮮王朝のひとつである百済（～660年）と友好関係にあったが、663年に両国の連合軍は、同じく朝鮮王朝の新羅（～935年）と中国の唐王朝（618-907年）に対して壊滅的な軍事的敗北を喫した。この敗北を受けて、侵略されることを恐れた朝廷は大宰府周辺に大規模な要塞の建設を命じた。664年、九州内部への敵のアクセスを遮断するため水城と呼ばれる巨大な堤防が築かれ、665年には、水城の内側の狭い平野を囲む山頂に2つの山城が築かれた。

西の都の成立

中国による侵略は起こらず、戦争への懸念は徐々に収束していった。8世紀の国際標準であった唐の芸術、宗教、政治構造などを研究するために外交使節団が唐の都に派遣された。これらの使節が戻り、彼らによって新しい仏教経典や仏教思想の形式、複雑な官

僚制の行政システム、早速大宰府造営に影響を与える碁盤目状の都市計画などがもたらされた。

新しい碁盤目状の都市の建設が始まったのは8世紀初頭で、奈良（平城京）の新しい都が同じ設計に沿って建設された頃であった。太宰府は710年に奈良の都ができた後にもなく完成し、現在の太宰府市の中央部を占めていた。広い中央大通りと軍事拠点、仏教寺院、役人を教育する養成所、住居などが整然と配置されていた。

それまでは博多湾沿岸にもっと小さな町があったが、水城のすぐ南にある要塞化された山間の盆地に移された。この新しい碁盤目状の都市の建設は、同様のデザインで奈良（平城京）に新しい都が建設される約20年前の689年頃に始まった。この大宰府の古代都市は、現在の太宰府市の中央部を占めていた。太宰府の都市は、広い中央の大通りや軍事拠点、仏教寺院、役人のための教育施設、住居などが整然と配置されていた。中央の大通りは南北に走り、主要な行政施設を起点に、街の南の入り口である羅城門に通じる道につながっていた。

行政と文化

大宰府政庁は、九州の周辺地域に大きな影響力を及ぼし、様々な行政的な役割を果たした。天皇に納める税や貢物は太宰府に集められ、集計された後、東の都に送られた。役

所には、紙を漉き、布を染め、病人を看病し、武器や鎧や船を修理する施設とその責任者がいた。また、食糧生産や堡塁と国境の警備なども統括していた。大宰府の文官向けの学校には九州各地から約 200 人の学生が集まり、行政、数学、医学などを学んだ後、それぞれの地方に新しい専門知識を持ち帰った。

太宰府はまた、国際関係の中心地でもあった。太宰府の役人達は、政治や貿易を円滑に進めるため、入念な準備をして外国の外交官を歓迎した。博多湾に到着した外国の使節団は、外国人向けの太宰府への公式な玄関口である水城の西門に続く道を進んだ。そこから大宰府の町の中に至ると、客館と呼ばれる迎賓館に迎えられ、素晴らしい料理やお茶、演奏等でもてなされた。また、太宰府には外国から一流の僧侶や知識人も集まった。

このような交流の結果、大宰府では芸術や文化が花開き、梅見や詩歌作りのような中国の風習が人気を博した。現存する日本最古の歌集『万葉集』(8世紀)には、太宰府近辺で詠まれた歌が数多く収められている。大宰権帥の一人であった大伴旅人(665-731)は、梅の宴を催し、現在の日本の年号「令和」の由来となった歌を詠んだ。

残された遺産

太宰府の隆盛は12世紀末まで続いた。その頃、港の重要性が増し、やがて権力の中心は博多湾や現在の福岡市にあたる地域へと北上していった。しかしそれでも太宰府は文

化的・宗教的に重要な場所であり続けている。これは、太宰府天満宮の存在のおかげでもある。太宰府天満宮は、学問・文化・芸術の祭神である天神様を祀る全国約 10,000 社の総本社である。太宰府天満宮で開催される祭礼は、かつて大宰府や宮中で行われていた文化活動や式典の多くを受け継いだものである。また、現代の国際的なアートプログラムを支援することで、芸術の洗練と異文化交流という太宰府の遺産を受け継いでいる。